



Title	小児・糸球体腎炎の治癒遷延例に関する研究
Author(s)	飯田, 洋文
Citation	大阪大学, 1970, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/30356
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 ・ (本 籍)	飯 田 洋 文
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	第 2 0 3 5 号
学位授与の日付	昭 和 4 5 年 4 月 1 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学位論文題目	小児・糸球体腎炎の治癒遷延例に関する研究
論文審査委員	(主査) 教 授 蒲 生 逸 夫
	(副査) 教 授 岡 野 錦 弥 教 授 阿 部 裕

論 文 内 容 の 要 旨

〔 目 的 〕

小児急性腎炎は予後良好と云われてきたが、著者の経験からは遷延するものが少ない。そこで小児糸球体腎炎の病態を明らかにすることを究極の目的として、急性腎炎の予後追跡調査ならびに発病後 6 カ月以上、未治例についての治癒遷延化因子の検討を行った。

〔 方法ならびに成績 〕

1. 診断ならびに治癒基準を定めて、急性腎炎の予後を追跡した。発病 1 カ月以内に阪大小児科を受診した急性腎炎 92 名 (男 49 名、女 43 名) 中、予後を追跡し得た 52 名の治癒率は発病後 6 カ月、1 年、2 年、3 年、4 年において、それぞれ 68.5、73.3、83.3、87.0、88.9% であり、小児急性腎炎は治癒遷延しても結局は治癒する症例が大多数であることを明らかにした。

2. 初診時すでに 6 カ月以上治癒遷延した症例 51 名 (男 22 名、女 29 名) 中、急性発病歴を有するものは 30 名で、うち 11 名 (36.7%) が治癒し、発病期不明のものは 9 名で、うち 1 名 (11.1%) が治癒した。

3. A 群 25 型溶連菌による流行性腎炎 3 年後の予後調査を行ったが、完全治癒は 37 名中 24 名 (64.9%)、前弯負荷時のみ軽度の蛋白尿を認め、欠損治癒とみなされるものを含めると、28 名 (75.7%) が治癒していた。

4. 発病 6 カ月以上未治例を治癒遷延例として、その遷延化因子と思われるものを検討した。発病時の尿素窒素値の高値、高血圧、先行感染を認めないもの、先行感染後発症までの期間の短いもの、ASLO 値の低値ならびに年長児、女性に治癒遷延するものが多い。さらに流行性腎炎の治癒遷延例の観察から養護不良も遷延因子として等閑視し得ないことを強調したい。家系調査、聴力検査、視力検査、尿中アミノ酸分析 (クロマトシートを使用し、2 次展開を行う佐野らの方法によった)、さらに左腎生

検による組織学的検索で遺伝性腎炎を疑われる症例はなかった。しかし姉妹罹患ケースが5組、姉弟罹患ケースが1組の同胞罹患例があり、体質的因子も関与するようである。

a. Waaler-Rose, R-A, Coombs テスト、血清蛋白分画(セルローズアセテート膜電気泳動)、血清補体価(Mayer, 高橋らによる50%溶血法による)などの検索では特別の知見を得られなかった。

b. 治癒遷延例の腎生検による観察には、10%ホルマリン固定、4 μ パラフィン切片を作製後のPAS, H-E 染色などによる光顕的検索、Palade 液固定、アセトンで脱水、Luft-Wood 法包埋、超薄切片作製後の日立製HS-7D 電子顕微鏡の検索ならびに95%冷エタノールで固定、4 μ パラフィン切片、抗人ガンマグロブリン・FITC ラベル羊血清、抗人フィブリノーゲン・FITC ラベルウサギ血清染色後のオリンパス社製蛍光顕微鏡による蛍光抗体法による観察を併用した。糸球体病変は大多数が focal であり、急性腎炎からの回復過程、あるいは静止型と考えられるものであったが、少数ながら進行増悪型と考えられるものが存在し、これらの症例は肥厚した基底膜や、増量したメサンギウムに、ガンマグロブリンやフィブリノーゲンが増量し、かつ電顕的検索においても基底膜内沈着物を認めるなど免疫課程の存在を示唆すると思われる所見を得た。

5. 肉眼的血尿を反復し、急性腎炎と誤診しやすい反復性血尿症候群は近年漸増の傾向があつて国際的な注目を浴びている。著者の14例は全例が6カ月以上治癒遷延し、その組織像は focal で、微小変化から慢性腎炎像まで種々のものが含まれていた。本症は一疾患単位ではないであろうが、いわゆる良性反復性血尿症候群には、臨床ならびに発病経過より糸球体腎炎とくにウイルス感染性腎炎の存在が想定され、基底膜上のガンマグロブリンの附着や、cyclophosphamide を用いる免疫抑制剤療法による著効例の存在から、その発病機序にアレルギー関与のものがかなり含まれることが推定された。

[総括]

1. 従来、小児急性腎炎は予後良好といわれてきたが、発病後6カ月の時点ではなお多数の未治例があり、4年後の治癒率は88.9%であった。

2. 遷延化因子は、重症度、疾患単位の違い、養護の良否、遺伝的素因、年令的因子を含む個体の反応性などが関与する。その遷延化機序は血清学的には立証し得なかったが、治癒遷延例における糸球体基底膜上のガンマグロブリンの増量や基底膜内沈着物の存在から免疫過程の存在が想定される。

論文の審査結果の要旨

本研究は小児急性糸球体腎炎の予後が従来信ぜられていたほどに良好なものでなく、発病4年後においてもなお11%の未治例があることを認め、その治癒遷延因子について臨床的並びに実験的に検討を行なっている。その結果非溶連菌感染性腎炎などの疾患単位のちがい、発病時の重症度、養護不良、性や年令因子を含んだ個体の反応性などが治癒遷延と関係あることを明らかにしている。

また、免疫蛍光抗体法により、進行増悪例の肥厚した糸球体基底膜や増量したメサンギウムに多量のガンマグロブリンの沈着を認め、さらに電子顕微鏡的に基底膜内に高電子密度の物質の沈着をみることなどから自己免疫の関与を示唆している。

以上の成果は今後の小児糸球体腎炎の診療に寄与するところが少ないと認められる。